蘇州と二日酔いは切っても切れない

五月四日（火）午前七時半。

蘇州の埠頭から候船室にとぼとぼと出てきた男が、僕だった。完全に二日酔いだった。頭の中には白い靄がかかっていた。トイレに入って小便をし、チャックを上げながらあくびをすると、大便中の男と目が合ってしまった。気まずく、そそくさと候船室に戻り、閑散とした候船室の椅子に腰を下ろした。さて、これからどうしよう

何人かの人たちが候船室の一角にある行李寄存処に集まって大きな荷物を預けていた。蘇州観光のあいだ、手荷物を預けておこうというのかもしれない。

これから、まずホテルを捜さないといけないのだけれども、重たい荷物をかついで歩きまわるのはしんどいので、とりあえず荷物をここに預けておこうかな、と考えていた。

そのとき、アナタが埠頭の方から出てきたのだった。

「アナタ！」

と、僕を見つけたアナタは知っている数少ない日本語の単語のひとつを繰り返す。

「一緒にバスで観光しよう」

と、埠頭の方へ引っぱっていく。

手荷物の札を受け取りながら、それも悪くはないかな、と僕は思う。乗りかかった船だから、もう少しつきあってみようか。

＊

昨夜、杭州発の船の四等ベッドで、小さなガラス窓から夕暮れの埠頭の景色を眺めながら、ちょっとした感傷にひたっているときにアナタとパンダは乗り込んできたのだった。

ベッドに腰を落ち着けるなり、アナタは煙草を吸い始めた。三〇歳前の男だ。二段ベッドの上ベッド、ちょうど僕のベッドの向かいだった。ごそごそと袋から快餐の弁当やら魚肉ソーセージを取り出し、それをつつきながら四川省産らしい酒を飲み始めた。

下ベッドでパンダはしばらく静かにしていたが、やがてアナタと口論を始めた。

何を言いあっているのか、かいもく分からないのだけれども、ただひとつなんとなく分かったことは、

「このベッドの予約をしたのは私なのだから、私の方が上のベッドだ」と

パンダは主張しているらしい。
パンダの方はこれまた三〇歳前らしい女性で、アイラインの化粧がパンダを連想させたものだから、瞬間に僕はそう名付けたのだった。
よく見ると、パンダは昼間チケット売場で僕のうしろに並んでいた女性だった。
しばらく言い合ったあと、パンダは実力行使とばかり、上のベッドに上がってきた。アナタは相手にしないで、煙草を吸いながら酒を飲んでいる。
「××××」
突然、アナタが僕に話しかけてきた。
「我是日本人。听不懂。(私は日本人なので、分かりません)」
少し驚いたようなアナタの顔が輝く。記憶の糸をたどるようにして、日本語で数字を数えはじめる、
「イチ、ニ、サン、…」
「アナタ、ニホジン、カ」
突然「アナタ!」と叫んで、魚肉ソーセージを差し出す。
アナタは新婚旅行中なのだ。パンダは目を丸くして、二人のやり取りを眺めていた。アナタとパンダは内モンゴルからやって来たという。アナタはこれでも銀行員なのだ。
カバンをごそごそとして、アナタは高そうな箱入り煙草を取り出した。
「まあ、一服」 とかなんとか言いながら、煙草の箱を差し出す。(中国の男たちは親しさの表現として、お互い煙草を相手にすすめるのだ。)
「アナタ!」
と言いながら、飲んでいた四川省産の酒をすすめる。
テーブルの発泡スチロールの弁当箱や食い散らかした魚肉ソーセージやらをひとまとめに、ガラス窓を開けて放り出す。
カバンからカメラを出してきて、パンダに写真を撮らせる。
「ピース、ピース」
四川省産の酒は甘い口当たりだが、とてもきついのだ。おまけにアナタは酒と煙草とをひっきりなしにすすめるので、僕は酔っ払ってしまったのだった。
思い出したように、アナタはポケットから一〇元札を取り出して、日本のお金と交換しようと言う。チェンジマネーではなく、記念のためなのだ。僕はパスポート袋を探って、一〇〇〇円札を取り出した。
「ほう、これが日本の札かいな」
というように、アナタは薄暗い明かりに透かして見ている。
アナタと僕とのやり取りをめずらしそうに見ていた乗客たちは、それを見て、とっかかりを見つけたかのように、私も私も、とやって来る。

一元のコインや札、一角札などがあちこちから差し出されて、僕は酔った勢いでわずかに残っていた日本円の小銭を吐きつくしてしまったのだった。

四川省産の酒も飲みつくして、アナタは調理場からビールを仕入れてくる、夜も更けて、ひとりふたりと乗客たちが眠りにつく頃。

ビンのまま、ビールを飲みながら、アナタは煙草を吸いつづけ、思い出したように「アナタ！」と言って、煙草を差し出すのだった。

パンダはベッドの半分に丸くなって眠っていた。

眠気と酔いが頭の中を交差していた。

なんだかとてもシアワセな気分になって、いつのまにか眠っていたのだった。

目覚めると完全な二日酔いで、ふらふらしながら小便に立ち、それから洗面所で顔を洗った。

川縁の朝の風景がゆっくりと流れていた。

砂利を満載した運搬船や何かの作業船が目の前をエンジン音をたてて通り過ぎた。それらのいくつかは住まいを兼ねているのだろう、甲板には洗濯や料理をする女の姿があった。

岸壁の向こうには田園が広がっていた。

黒い水牛が尻尾を振っていた。

ベッドに戻ると、おそらくアナタが昨夜のうちに注文したのだろう、ラーメンが運ばれてきた。

「アナタ！」

と青いながら、ひとつを差し出す。

ラーメンは、と言うより中華ソバはうまかった。

*

アナタに誘われて、再び埠頭の方へ戻ってみると、観光バスが停まっていた。

座席の半分ほどはすでに観光客で占められていた。

空いた座席に腰を下ろし、しばらく待っていると、しだいに乗客は一杯になってきた。車掌兼ガイドらしき男が乗客のチケットを確認する。チケットはもちろん持っていなかったので、男から買った。七元五角。蘇州一日游のチケットだ。

庭園の街の観光バスにふさわしく、埠頭を出発したバスは、網師園、拙政園、獅子林とまわっていく。それぞれの庭園で一時間ほどの見学時間が

あり、水池、築山、建築の三者の調和を考えられた名園を堪能できたのだけれども、いかんせん二日酔いはボディーブローのようにしだいに効いてくるのだった。

また、全体として中国の庭園はごてごてとした印象で、日本人の僕にとっては美というよりもむしろ奇なのだった。その景観はむしろ奇景であり、最初こそは物珍しさもあって、美しさを感じていたのだけれども、しだいに辟易してくるのだった。それにはもちろん二日酔いのボディーブローが僕の美意識に影響を与えていたということもあるだろう。

さて一方、かの中国人の新婚カップル、アナタとパンダや中国人の観光客の方はどうだったかというと、彼らはただひたすら写真を撮りまくるのだ。それも庭園自体を撮るのではなくて、お互いをモデルとして撮りあうのだ。美しい庭園もまたモデルを引き立てるための背景に過ぎない。いいポイントを見つけると、彼らはいそいそとポーズをとり、まわりの視線など気にすることもなく、気合を入れてフレームに収まる。

アナタとパンダが新婚旅行だということもあって、僕は気を使って、二人一緒のところを撮ってやろうとするのだが、彼らはむしろ一人一人でモデルのようにポーズをとって写真に収まることを好むようなのだった。

網師園付近のお土産屋で、パンダは大理石のような石の玉を買った。それは直径五センチほどの玉で、ふたつがひと組みになっている。それを手の中でころころとところがして遊ぶ。古い時代から伝わるもので、健康にもいいのだという。

お昼近くになって、しだいに疲れてきた頃に、ようやく寒山寺付近の食堂で昼食となった。アナタとパンダと僕はひとつのテーブルを囲んで食事をとった。当然のように、アナタは僕に支払いをさせない。

「アナタ！」とあいもかわらず繰り返しながら、煙草の箱を差し出すのだった。

昼食後の観光は奇僧寒山・拾得で有名な寒山寺から始まった。寒山寺はまた、張継の詩「楓橋夜泊」によって日本人にはとてもなじみの深い寺でもある。

山門をくぐって、一歩境内に足を踏み入れると、ずいぶん久しぶりのような気がする日本語の会話が耳に飛び込んできた。それはとても断片的な会話だったのだけれども、そのべっとりとしたような語感はどこかで僕の生理的なものに触るような気がした。

それはもちろん嫌悪ではない。とてもほっとするような、なつかしいような感触なのだ。だけれども、旅とはその生理的な日本というものをかりそめにせよ抜け出すことだと僕は思う。うまく言えないけれども、日本人観光客たちは日本を運んでいるような気がした。かといって僕は僕の旅

をこれだとは今は言えないのだけれども。
　寒山寺からお土産物屋にはさまれた小道をたどって、楓橋へと向かう。日本人のグループとすれ違う。ふとまた、日本語の会話が耳に飛び込んでくる。
「リーペンレンマ（日本人か）？」
とアナタは尋ねる。
「シーダ（そうだ）」
ぶっきらぼうに、僕は答えた。

月落烏啼霜満天　月落ち烏啼いて霜天に満つ
江楓漁火對愁眠　江楓の漁火愁眠に対す
姑蘇城外寒山寺　姑蘇城外寒山寺
夜半鐘聲至客船　夜半ば鐘聲客船に至る

情感をなぞってどうなるのかと僕は思う。
　しかし、僕もまた情感をなぞる中国人観光団体の一員なのだった。ただ、中国人たちの観光はひたすらポイントを見つけてスナップを撮ることだったし、アナタも僕もすでにグロッキーという状態だったのだ。
　バスはさらに春秋時代（紀元前五〇〇年ごろ）からの由来をもつ虎丘、そして留園とまわり、最後にはあまりのハードスケジュールにぐったりとして、僕は庭園を一瞥しただけで切り上げて、庭園の売店でジュースを買って、ひとり休憩していた。
　中国人たちはというと、やはり彼らにとってもハードな観光だったようで、バスの中では多くの人々が眠りこけていた。
　ガイドは最後に今日一日でまわった庭園や名所の入場券の半券をまとめて配り、バスは終点、蘇州の火車站に到着したのだった。
「再見！」
　と言って、僕はアナタとパンダの二人連れと別れた。
　アナタとパンダはいささか疲れた顔をして火車站の候車室の方へと歩いていった。
　埠頭に荷物を預けてあったので、急いで火車粘から路線バスに乗って、蘇州の街の北端から南端へと急いだ。というのも、行李寄存処は午後五時に閉まってしまうからなのだった。
　閉店直前に駆け込み、預けた荷物を受け出して、南林飯店というホテルへと向かった。南林飯店はガイドブックでは、ドミトリーのあるホテルとして紹介されていた。また、南林飯店以外にもその付近にドミトリーのあるホテルがいくつかあるはずだった。

＊

蘇州の街は、外城河と名付けられた運河（といっても、日本の一級河川ほどの川幅があるのだが）によって四角く囲われている。運河はさらに外域河から城外に向けて放射状に伸びている。

客船の埠頭は外城河の南辺にあり、そこから人民橋を北に渡ると、蘇州のメインストリート人民路であり、人民路は蘇州城内を南北に貫いて、外城河の北の外れにある火車站へと至る。

すでに城壁はほとんど見られないが、蘇州は城壁の外回りを四角く囲う運河の存在によって、城壁に囲われた中国の郡市としての名残をとどめている。

また城内のいたるところに小運河が伸びていて、かつては蘇州の人々の暮らしはこれら運河と切っても切れないものだったのだろうと想像させる。

人民路をしばらく北上し、十全街という通りを東へ入っていく。メインストリートから外れると、自動車道と自転車道の区別はなくなり、車道には自動車やバスそれに自転車やリキシャ、荷車などがお互いを器用に避けながら行き交っている。

しばらく行くと、南林飯店の大きな門、そして脇には守衛室のような建物。門の内側には並木道が続き、ホテルの建物は見えない。まるで立派な庭園のようなのだった。

いささか気後れしながらも進んでいくと、やがて立派なホテルの建物が現れた。ロータリーの脇にはいかにも高級そうな自動車や観光バスが並んでいた。

直立するドアボーイの脇を通り、ロビーへと入っていった。ドアボーイもフロントの服務員もそれぞれの制服に身を包んでいる。いかにもそれらしいホテル（！）なのだ。

「ウォシャンツーニメンファンテン（このホテルに泊まりたいのですが）」

フロントの女性に声をかける。

「サンパイバーシウー」

と、女性はちらっと視線を投げながら答えた。

「サンバイ…」

とまどいながら考えていると、ふとその意味に思い当たる。

「三八五元！」

とんでもない値段なので、僕はあわてて問い返す。（昨夜の船旅は一泊

約二〇元だった）
「トーレンファンヨウマ？（ドミトリーはありませんか）」
「メイヨウ」
フロントの女性はそっけなく答え、他の客との応対を始めた。
とりあえず他のホテルを当ってみようと思って、南林飯店を出た。
入口の門を出たところには、何台かのリキシャが止まっていて、待ちかまえていた男たちが声をかけてくる。
「どこへ行くんだ」とか「チェンジマネー？」とか。
そのうちのひとりに尋ねた。
「このホテルは三八五元もする。もっと安いホテルを知らないか」
若い男は胸を叩いて、
「一〇〇元のホテルがある」
と言いながら、リキシャに僕を招く。
男のリキシャに腰を下ろし、煙草を吸いながら、僕はふと「これはもしかしたら、あのパターンではないか」と思い当たる。杭州で苦労したホテル捜しのパターンだ。
案の定、男が最初に案内してくれたホテルは「満」なのだった。
男は、こんなはずではないという顔をしながら、そうか、今日はお偉方の会議があるんだ、とかなんとか言い訳をする。そして、少し考えたあと案内してくれたホテルはなんと四〇〇元もするのだった。
僕は少し焦り始めていた。若い男はたまたま通りかかったホテルの女性服務員の制服姿を見て、きれいだなあ、と見とれていたりするのだったけれども。
ガイドブックに載っていたホテルは、もちろん男も知っていたけれども、改築中で泊まることはできない。
南林飯店のある一帯は閑静なホテル街といった趣だったけれども、僕たちはそこをあきらめて、少し賑やかな通りへ出ていった。
男はいくつかの招待所にリキシャを止めて入っていく。ことごとくが、外人はダメだったり「満」だったりした。
最後に男は通りから狭い小道を入っていった所にある旅社へと案内した。
「中国人に成りすまして泊まれ
と言う。
「他の客とは絶対に話をするな」
念を押しながら受付の窓口へと向かう。
窓口には宿泊カードが置いてあり、男はそれを取って、記入するようにと言う。それには本籍とか職業とかを記入しなければならないのだけれ

ども、中国の住所をデッチ上げて記入するにしてもどうにも分からないので、僕は仕方なく日本の住所や職業を日本式に記入したのだった。
男はそれを窓口のおばさんに差し出した。
おばさんはそれをじっと見たあと「なんだこれは！」というようにわめきだした。
「とっとと帰れ！」
とでもいうように、手を振るのだった。
男は差し返された宿泊カードを見るなり「ダメだ、これじゃあ」と苦笑いをした。
結局、南林飯店まで戻ってもらって、僕はチェックインしたのだった。
フロントで手続きをしていると、リュックをかついだ日本人の旅行者がやって来た。彼は、三八五元と聞くと、八〇〇〇円か、と呟きながら、平然と手続きを始めた。
僕はそれが分からなかった。確かに八〇〇〇円のホテルというのは日本の感覚では決して高くはない。しかも庭園の中の大ホテルなのだ。むしろ安いとも言えるのかもしれない。
しかし何日か中国を歩いてきて、しだいに中国の金銭感覚に染まってくると、三八五元というのはとてつもない大金に思えてくるのだった。現にそれは大都市に住む中国人の平均月収以上にも当たるのだ。
大理石のロビーを渡り、エレベーターに乗って、五階で降りる。
五階担当の女性服務員に部屋を開けてもらう。
見事なツインルームだ。

ホテルの部屋でしばらく休憩したあと、僕はともかく観前街という通りへ行ってみようと立ち上がった。
観前街というのは玄妙観という寺院の門前街で、蘇州一の繁華街であり、また火車の售票処（チケット売場）とガイドブックで紹介されている安ホテルがあるはずだった。
方針を決めていたわけではなかったけれども、火車のチケット売場を確認すること（すでに時間的に閉まっているだろうが）と他の安ホテルに当たりをつけておくことが必要だった。このホテルに二泊もすることは問題にならなかった。
バスを降りて、観前街の入口から通りに入っていった僕は、その賑わいに篤いた。すでに暮れ落ちた蘇州の街で、その通りだけがお祭りのような賑わいで、あふれるような人波が行き交っていた。通りには洋服や小物の露店や様々な食べ物の屋台が並んでいた。
なかなか思い通りにはいかない中国の旅だけれども、このような人々

の活気に出会すと、自然に元気がわいてくる。これといった理由もなく、心が浮き立ってくるのだった。

観前街を歩いていると、あちこちに招待所の小さな看板が出ていた。賑やかな通りを離れて、ひっそりとした路地を入っていく。ダメでもともとというつもりで、声をかける。もちろん外国人は泊まれないのだが、日本人がこんなところにやって来たということがめずらしいのか、親切に応対してくれる。ガイドブックに紹介されていた飯店の名を告げると親切に表通りまで出て道を教えてくれる。もちろん中国語なので、僕はだいたいのところで相槌を打っていたのだけれども。

招待所の人が教えてくれたように観前街を横切って裏通りへと入っていく。裏通りをしばらく行くと、それらしい広場があり、広場のまわりには映画館やレストランが店を出している。確かにこの付近らしいのだが、目指す安ホテルはない。それらしい建物はいくつもあるのだが、どれもがホテルではないのだ。

映画館の脇でたむろする若者たちやリキシャのそばを通り、幾度も同じ果物の屋台の前を通り、捜しまわるのだけれども、目指すホテルには行き当たらない。

どうしても見つけることができないので、あきらめて、今度は火車の售票処を捜した。地図を見ながら観前街や裏通りを捜すのだけれども、こちらの方も見つけることはできなかった。

すでに夜の一〇時を過ぎていた。賑やかな観前街も、しだいに人通りが少なくなっていた。

全てを明日のことにしようとあきらめて、終わりかけていた屋台で焼きそばを食べた。

観前街を抜けてバス通りへ出ると、通りにそって運河が水をたたえている。水は静かによどみ、向こう岸の赤レンガの建物も静かだった。夜も静か。バス停で待っている人たちの声も心なしかひそやかに響く。

運河の脇のバス停で、なかなか来ないバスを待ちながら、不思議に僕は満足していた。明日のことは何も分からないけれども、例えば明日の今時分、どこでどうしているかなど、何も分からないのだったけれども、心のどこかがしんとして、僕は満足しているのだった。そのことを伝える言葉を僕は持っていないのだけれども。

翌朝、南林飯店を出た僕は、とりあえず火車站へと向かった。明日、午前九時二二分発の鎮江（ジェンジャン）行きのチケットを手にいれるためだった。

昨夜は観前街で售票処を見つけられなかったので、もしかしたら火車

站にあるのかもしれないと思ったのだ。
バスを降りて、駅前広場を見渡すと、果たして真新しい售票処の建物があった。昨日、観光バスを降りて、アナタやパンダと別れたとき、どうして気がつかなかったのかと思うほどの立派な建物だった。
售票処の中はたくさんの中国人たちがひしめいていた。行列の前方を見ると、一〇ほどもある窓口はそれぞれの行き先別になっているらしい。
鎮江は南京の手前にある駅だったので、僕はいくつかある南京方面行きの窓口のひとつに止んだ。二〇人ほどが列をつくっていた。
しばらく並んでいると、うしろの男が肩を叩いて、
「サンサンリューマ（三三六次か）」
と尋ねる。
男に聞かれて、改めて時刻表を見てみると、三三六次の列車は一二時二二分発で、蘇州始発の南京行き、僕が買おうとしていたのは、三四〇次、上海発の途中乗車になる。
考えを巡らして、僕は三三六次の列車に転向したのだった。始発列車の方がチケットを買いやすいだろうし、座席も指定されている。それに一二時過ぎの発車だから、これから南林飯店に戻ってチェックアウトしてからでも充分に間にあう。蘇州でもう一泊するつもりだったけれども、昨日観光バスで蘇州の庭園は満喫したし、昨夜は観前街をうろつくこともできた。このまま鎮江から揚州へ行ってもいいのではないか。
窓口で、一〇元札を差し出しながら、
「サンサンリュー、タオジェンジャン」
と告げた。
チケットと三元のおつりが投げ返される。

バスを降りて、南林飯店へと急いだ。運河沿いの道を歩いていく。午前の日差しの中で見てみると街中の小運河は思いのほかきたない。くすんだ緑色の運河の水はよどんでいて、いまにもメタンガスが立ち上ってくるような様子なのだった。
かつての美しい運河の街、蘇州はおそらく生活排水のためだろう、その運河は確実に死にひんしているようだった。
白壁の家と家との間を縫うようにして流れている無数の運河。それは構図としては美しいものだったけれども、実は流れというよりもよどみ、その歴史をたたえられる蘇州の内ふところでゆっくりと腐っていくかのようだった。
南林飯店でチェックアウトをすませて、再びバスに乗り、火車站へと向かう。

バスは蘇州の街を縫いながら、比較的狭い通りを走っていく。メインストリートの人民路とは違って、自動車道と自転車道との区別はない。繁華街にさしかかると、道路いっぱいに自転車がひしめいている。バスの窓から眺めていると、まるでぶんぶん唸る小蜂の群れのようだ。バスはクラクションを立てつづけに鳴らし、自転車をけ散らすようにして進んでいく。自転車は自転車で、平気でバスの前を棟切ったりする。よくもまあ事故が起きないものだと感心する一方で、もしも事故が起きて列車に乗り遅れたらどうしようと本気で心配しながら、人民中国の人民どうしの果たし合いのような道路の混雑を見ていた。